早稲田大学博士論文(概要)
2006 学位記 4427 文科省報告 甲 乙2068
W 学位論文 4427 2

論文概要書

張自烈『正字通』研究

古屋昭弘

『正字通』(康熙十年、1671 年)は『康熙字典』(1716 年)の藍本のひとつとして、明代万暦年間刊(1615 年頃)の梅膺祚『字彙』と並び称される大型字書である。全十二集、見出し字として 3 万 3 千余字を収録する。康熙年間に集中的に翻刻されたものの、清の学者たちの『正字通』に対する評価は低く、現代に至るまでそれ自体が研究対象となることは稀であった。「四庫全書」について言えば、かろうじて「存目」として著録されたに過ぎない。康熙年間の徐文靖はその著『管城碩記』巻二十一〜二十四において、『正字通』の注釈の「誤り」を多く指摘しているが、それに対し四庫の館臣は「『正字通』のたぐいは、もともと誰もそれを信奉していないのに、(徐文靖が)わざわざ多くの言葉を費やして、古人の書と同列に批評しているのは、なんともご苦労なことではないか」と言う。この評語からも『正字通』に対する清代知識人の見方をうかがうことができよう。

一方、日本では、康熙十年(1671)に初刻本が出て数年後、早くも舶載され、江戸時代を通じてよく利用された。たとえば宝暦九年(1759)の、ある一艘の唐船によって運ばれた『正字通』は、なんと六十五部、六百五十二套の多きに達する。浄土宗の珂然という熱烈な信奉者も得た。珂然は寛保元年(1741)『正字通作者辯』という本を出版し、『正字通』を賞賛するとともに、真の作者の問題を論じている。幕末から明治にかけて『広益正字通』『新選正字通』などの小型字書が出ているが、「正字通」を字書の代名詞のように使ったものである。ただし、浩瀚に過ぎるその内容ゆえか、『字彙』や『康熙字典』とは違って、和刻本は出ていない。

音注の問題はさておき(後述)、全体として見た場合この字書がたいへん有用であったことを忘れてはならない。『正字通』には「理を窮め実用に適応させる」という考えが貫かれているため、各字の注釈は往々にして甚だしく詳細かつ親切である。また俗字や僻字に対する論議も傾聴に値することが多い。清朝考証学者のような知識人から見ると雑駁に見えるであろうが、中国の一般知識人や、特に日本や朝鮮の知識人、更にはヨーロッパの宣教師や漢学者にとっては、参考価値が非常に高かったと思われる。

今回『正字通』の音注、特に反切を全面的に調査した結果、それが江西贛方言地区の一方言音(おそらく読書音)を体系的に反映することが判明した。序章で紹介したとおり、他の大方言に較べた場合、贛方言の研究はまだまだ少なく、特に特定の時代・地点の音韻体系の全体像を示す資料は皆無に近い。他の

大方言の場合も明末清初の音韻体系の全体像を示す資料は決して多くはない。『正字通』の音注が方言史・音韻史の資料として貴重であることがわかる。本論文の目的もこの方言音の体系的な再構に置かれる。

この書をより有効に利用するためには、作者の生涯及び成書過程に対する詳細な調査探究がぜひとも必要となる。特に重要なのは作者がいかなる言語生活を送ったかという点であろう。

本論文第１部は歴史・版本篇として、その点を中心に論じたものである。現在ほぼ共通の理解となっている事項を整理する意味で、清代の『四庫全書總目提要』「經部小學類存目、正字通」の記述の要点を挙げれば、以下の通りである：

（一）『正字通』の真の作者は明の張自烈、字は爾公、江西南昌の人。

（二）廖文英、字は百子、連州の人。康熙初年、南康府知府の任にある時、張氏の書を購入、巻頭に満文「十二字頭」を加え、自分の名で出版。

（三）二人の死後、成書の経緯を知る友人等の力添えで、張氏の名を冠した版本も出現。

以上は大筋としては勿論問題ない。本論文第１部第１章では、特に（一）（二）について、新知見も含め、細節に渉る描写ならびに補充説明を加える。多くの資料を使って張自烈の年譜も作成（第５章）。

明末の党社「復社」の巨頭として名を馳せた張自烈の生涯を詳しく追いながら、南京での侯方域（侯朝宗）・冒襄（冒辟疆）・呉応箕（呉次尾）・陳貞慧（陳定生）・黄宗羲・沈壽民らとの交流（ほとんど『桃花扇』の世界である）、明末清初の動乱の中、左良玉の軍によって齎された張自烈一家の悲劇に触れつつ、そのような歴史の中で『正字通』がどのようにできていったのか、その成書過程を明らかにする。今回、新たに明らかになったことは、張自烈の故郷が江西の南昌ではなく確実に宜春であること、清初順治年間、張が南京で『正字通』を増訂するに際して友人方以智との間に学問的交流があったこと、張と廖文英の長年にわたる交流および晩年の張と廖一家の白鹿洞書院での交流から見て「廖文英が張自烈の著作を我が物にして出版した」という定説には再考の余地があること、『正字通』の幾つかの版本に見られる満洲語の字母表の編者廖綸璣が廖文英の子であったこと、などである。

第２章～第４章では（三）に関連する版本の問題を詳論する。『正字通』自体に多くの版本があるのみならず、『字彙辯』という前身があり、崇禎末年にはそれがほぼ完成していたことが、方以智の序から判明。『字彙辯』の初期の段階を伝えるものが、『正字通』よりあとに出版された『増補字彙』である。これらを簡単にまとめれば、以下のようである。

『正字通」版本の系譜

明崇禎年間

1642　　張自烈『字彙辯』初稿

清順治年間　『字彙辯」刊行　→　1690『増補字彙』

順治年間　増訂修補

康熙年間　廖文英に譲渡

1671　　白鹿洞書院蔵板初刻本

↓

同上修訂本　→　弘文書院本(第一種)　→　芥子園本

↓　→　三畏堂本

1678　　劉炳補修本

↓

1685　　清畏堂蔵板本

↓

同上原板本

{↓は同版、→は翻刻の関係を示す。このほか弘文書院本(第二種)もあるが、翻刻の状況が今ひとつ明らかでない}

特に白鹿洞書院蔵板初刻本（白鹿内閣本）と同修訂本（白鹿東大本）との間に音注の面だけでも多くの違いがあることを発見した。個別の字の改定において満洲族による支配が影を落としていること、修訂本を直接受け継ぐ劉炳補修本の成立過程に三藩の乱が大きく関わっていること、平南王尚可喜が廖文英の故郷広東連州に派遣した将軍（総兵）劉炳に、『正字通』の本当の作者が張自烈であることを告げたのが明の遺臣金堡であったことなども考証した。

本論文第２部は音韻篇である。『正字通』は専ら『字彙』批判を目的として作られただけに、その音注、特に反切も『字彙』とはかなり違うものとなっている。一方『字彙』の反切自体は『洪武正韻』の反切を基盤として、その中に編者梅膺祚の安徽呉語の字音の影響が少し顔を覗かせるもの。『洪武正韻』乃至『字彙』の反切は、『広韻』などの伝統的な韻書と比べた場合、声母や韻母の一部合流は見せるものの、声母の全清・次清・全濁の区別は保っている。声調の枠組みもほぼ中古的四声のままである。

これに対し『正字通』は、反切帰字の平仄に関わらず、『字彙』の多くの全濁反切上字を次清字に、また多くの次清反切上字を全濁字に換えるなど大幅な改訂を施している。その結果、「譬＝備」「勸＝倦」（いずれも左が次清、右が全濁）

のような、客家方言（広東・江西・福建・四川などの諸省の一部地域）や贛方言（江西省の多くの地域および湖南省の一部）およびその他ごく少数の一部の方言に特有な同音化が起こっている。また韻母の面でも、臻深梗曽四摂の合流や山咸二摂の合流（例えば「姻＝音＝英＝鷹」や「壇＝談」）など、摂を越えた韻母の合流が多く見られる。

いま少し具体的な例をあげてみたい。万暦年間の『字彙』、崇禎末年の『字彙辯』の段階を反映する『増補字彙』（刊行は康熙年間）、および『正字通』の反切を比べてみたい。

		『字彙』	『増補字彙』	『正字通』	
秤	次清昌母	丑正切	丑正切	丑正切	（丑：次清徹母）
鄭	全濁澄母	直正切	丑正切	丑正切	（直：全濁澄母）
策	次清初母	恥格切	初格切	初格切	（恥：次清徹母 初：次清初母）
宅	全濁澄母	直格切	直格切	初格切	（直：全濁澄母）
兔	次清透母	土故切	土故切	土故切	（土：次清透母）
度	全濁定母	獨故切	獨故切	土故切	（獨：全濁定母）
次	次清清母	七四切	七四切	七四切	（七：次清清母）
字	全濁從母	疾二切	七四切	七四切	（疾：全濁從母）
磬	次清溪母	丘正切	丘映切	丘映切	（丘：次清溪母）
競	全濁群母	具映切	丘映切	丘映切	（具：全濁群母）
礮	次清滂母	披教切	鋪告切	鋪告切	（披鋪：次清滂母）
抱	全濁並母	部巧切 又蒲報切	鋪告切	鋪告切	（部蒲：全濁並母）
毯	次清透母	吐覽切	徒覽切	徒覽切	（吐：次清透母）
淡	全濁定母	徒亶切	徒覽切	徒覽切	（徒：全濁定母）

要するに『字彙』や現代北京語（以下のローマ字）では

秤 chèng≠鄭 zhèng　策 cè≠宅 zhái　兔 tù≠度 dù　次 cì≠字 zì

磬 qìng≠競 jìng　礮 pào≠抱 bào　毯 tǎn≠淡 dàn

というような状況であるのに対し、『増補字彙』『正字通』すなわち張自烈の方言では、

秤＝鄭　策＝宅　兔＝度　次＝字　磬＝競　礮＝抱　毯＝淡

のような同音の現象が見られるということである。このような同音現象は中国語の歴史の中、あるいは（上述のとおり）現代の方言の中で、決してしばしば見られるものではない。

明末清初と現代の間で言語状況が同じとは限らないことを銘記しつつ、試み

にこれらの特徴を同時に持つ地点を現代方言の中から探してみると、数少ない地点の中に張自烈の故郷宜春が入ってくる。これはやはり偶然ではありえないと思われる。つまり『正字通』の音注が反映するのは作者張自烈の方言音（おそらく読書音）である可能性が高いと判断される。

そこで本論文第２部では、まず第１章で音注の特徴と 17 世紀の江西方言音との関連を考え、次に第２章で内閣文庫蔵白鹿書院本にこそ張自烈の音注の本来の姿が見られることを他の版本の音注との対照を通して考証（附表あり）、第３章では張自烈が『字彙』の反切を改造あるいは継承するに当たって細心の注意を払っていたことを論じたのち、白鹿内閣本の音注に基づいて反切系聯法を適用する。声母と韻母の分析をしたうえ、現代贛語をも参照しつつ張自烈の字音体系を再構、第４章として同音字表の形にまとめた。白鹿内閣本『正字通』の読書音体系は、イエズス会宣教師が 17 世紀初頭に編纂した韻書『西儒耳目資』などに見える明末清初の官話とかなり近い面もあり、だからこそ張自烈は自分の読書音こそ「正音」であり「南北之通音」であると考えていたと理解される。

他の 16～17 世紀の韻書・韻図の場合も同様である。たとえば 16 世紀の崑山呉方音を反映する『聲韻會通』、17 世紀の安徽呉方音を反映する『音韻正訛』、17 世紀の江西客家方音を反映する魏際瑞『翻竊』、17 世紀の閩南方音を反映する廖綸璣『拍掌知音』（廖綸璣は廖文英の子）など、みな口語音を収録しないようである。この事実は、これらの資料に描かれた音系が当時の知識人の読書音であること、また各作者が自分の方言音に絶対的自信を持っていたことを物語る。いずれにせよ『正字通』が声母などの面で濃厚な贛方音的特徴を具えていることは否定できない事実であり、方言音韻史ひいては中国語音韻史研究のための貴重な資料であることに変わりはないと考えられる。

第５章では『正字通』の全濁上声の扱いを論じる。全濁上声の去声への合流は、平仄の区分には影響を及ぼさないとはいえ、広い地域で早くに起こったと推定されるものである。全濁上声字と全濁去声字の間に四声別義の関係がある場合、古典学の上でも当然大きな混乱を齎したはずである。一方、時代の推移と共に、現実の発音の変化、あるいは方言的な読書音の影響のもと、古典学の中ですら中古的声調の捉え方をしない知識人が出現してくる事もまた自然な流れであろう。本章ではそのような近世知識人の中古全濁上声字に対する扱いの一例として『正字通』を取り上げる。

巻末に本論文全体に関する詳細な書誌をつけた。